

黙示録13章11－18節 「獣を拜ませる偽預言者」

1A 別の獣の権威 11－13

2A 獣の像の礼拝 14－15

3A 獣の刻印 16－18

本文

私たちは今、黙示録 13 章に入っています。前回、13 章の前半部分 1-10 節までを見ました。前回も今回も、そのテーマは「獣の国」です。神が願われているもの、そして私たちが待ち焦がれているものは、キリストの御国です。「11:15 この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」神に罪を犯して、神の支配、神の国から離れてしまった人間がいます。けれども、小羊キリストが私たちの罪のために屠られて、その流された血で私たちを買い取ってくださいました。そして三日目に甦られて、その大能の力によって被造物を再び支配しようとしておられます。「コロサイ 1:13-14 御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。14 この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

しかし、それを由としない悪の勢力があります。サタンであり、その手下である墮落した天使どもです。サタンは一人の人に、自分の力と位と権威を与えます(13:2)。彼は致命傷を受けて、悪霊どもが閉じ込められている底知れぬ所に行ったのですが、けれども、その力で息を吹き返しました。それによって、獣が自分たちを救ってくれる力ある存在だとして、地上に住む者たちが獣をあがめ、獣を拜むようになります。そして、その結果として竜、悪魔そのものも拜むようになります。このようにして、地上において神の国に対抗する、獣の国を打ち立てます。この前、学びましたように「反キリスト」という「反」は、反対するという意味よりも、「代替する」という意味合いが強いです。本物に摩り替えた偽物ということです。似て非なるものです、似ているので偽物を掴まされます。サタンは、神が行なわれる贖いのご計画に真似て、神がキリストを甦らせたということを真似て、獣を蘇らせたように見せかけたのです。

そして、獣は、三年半の間、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許されます。教会に対しては、主は、陰府も教会には打ち勝てないという天の御国の鍵が与えられていましたので、迫害を受け、殉教しても、それでも残された者たちはさらに聖められ、教会が前進するという勝利の中にあります。けれども、この時期はそのような望みさえありません。ただ殉教するだけです。ですから、この時にかつてのペテロのように、捕えに来た者たちに剣で立ち向かっても無意味です。甘んじて相手の剣によって殺されるしかありません。それから、天にあるもの、神ご自身の御座、天に住む者たちを獣は冒瀆します。善なるもの、神とキリスト、それに属する者たちをいかに悪であるかとそ

しることです。

こうして、悪魔が、神とキリストの関係を真似して獣の国で対抗しますが、さらにもう一人の獣、偽預言者を立てます。神の国は、父なる神のご計画、子なるキリストによる贖い、そして聖霊による贖いの保証によって成り立っていますね。パウロがエペソ人に、こう書きました。「エペソ 1:13-14 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとなされ、神の栄光がほめられたためです。」聖霊の証印をキリストの福音を信じた者には、押されます。そして、聖霊は神の贖いの保証となっております。このようにして、三位一体の神がご自分の国を立ててくださるのですが、そこで悪魔も、偽の、聖霊のような働きを偽預言者に対して行ないます。

1A 別の獣の権威 11-13

¹¹ また私は、別の獣が地から上って来るのを見た。それは、子羊の角に似た二本の角を持ち、竜が語るように語っていた。

「別の獣」とあります。これは、1 節にある海から出て来た一匹の獣、反キリストとは異なる、別の獣ということです。「別の」のギリシア語では、「同じ性質をもった別のもの」という意味の言葉です。ヘテロスというギリシア語もあって、それは他の性質をもった別のものという意味があります。反キリストと同じような力、位、権威を持っているということです。この言葉で思い出す約束はないでしょうか？そうです、イエス様が聖霊の約束を弟子たちに与えられた時です。「ヨハネ 14:16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにして下さいます。」イエス様が弟子たちを助けられました、主が天に昇られるので、彼らは孤児のように置き去りにされてしまいます。けれども、イエス様はそんなことはしない、ご自身と同じ力と性質を持っておられる助け主を与えると約束されたのです。この偽預言者はキリストに対する聖霊の働きと、似たようなこと、物真似を行なうのです。

ところで、なぜ彼が偽預言者であることが分かるかと言えば、他の箇所でも偽預言者と書いてあるからです(19:20)。

そして彼は、「地から上って来る」とあります。初めの獣が海から出てきていましたが、その海は様々な国、国語、民族などを表していました。世界における国々の興亡を、その荒波の立つ海が象徴していました。では、この地上は何を示しているのでしょうか？これは、「天に対する地」を表しています。イエス様がニコデモに、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ 3:3)」と言われましたね。ここは、「上から生まれなければ」と訳すこともできます。つまり、天によって生まれる、天につながったもの、神につながったもの、神の命にあずかった、という

ことであります。ちょうど海の中を酸素ボンベにつながれて生きている潜水士のように、天の御座におられる神につながって、地上を新たな命によって生きています。

ですから、御霊によって生まれていない者は、神の事柄を悟ることはできない、ただの人であることをパウロはコリント第一で話していました(1:24)。つまり、この偽預言者は、いろいろなしるしを行ないますが、けれども結局、「生まれながらの人間、ただの人」なのです。イエス様が言われた偽預言者そのものです。「マタイ7:22-23 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』」23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』そして、ペテロ第二やユダに偽教師の特徴が書かれていますが、そこにも御霊がおられないことを、指摘しています。「ユダ 19 この人たちは、分裂を引き起こす、生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません。」

そして、偽預言者は「子羊の角に似た二本の角」を持っているとあります。イエス様が七つの角をもった小羊として現れておられたことを思い出してください(5:6)。角は権威や力を表していますが、キリストが神の権威と力を持っておられる方であることがわかります。ところが、二本の角を偽預言者は持っています。つまり、ここでキリストの権威の真似事をしているのです。それで、「竜が語るように語っていた」とあります。彼は、力と権威によって語ります。イエス様が、山上の垂訓を語り終えられた時に、聞いている人たちが驚いたことを思い出してください。他の教師たちと異なり、力と権威によって語られたからです。神の権威と力があるからです、その物真似をしているのです。

¹² この獣は、最初の獣が持っていたすべての権威を、その獣の前で働かせた。また、地と地に住む者たちに、致命的な傷が治った最初の獣を拝ませた。

13 章 4 節で、人々が獣を拝むのですが、そこには、この、別の獣の働きあってこそ、獣礼拝であることが分かります。初めの獣が政治的な指導者の要素が強い一方、この獣は宗教的な要素が強い人物であります。そして、「最初の獣が持っていたすべての権威を、その獣の前で働かせた」とあります。自分自身に栄光を帰すのではなく、初めの獣、反キリストに人々が礼拝するように仕向けていきます。イエス様が、もう一人の助け主、御霊についての働きを次のように言われました。「ヨハネ 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。」御霊はご自身の栄光ではなく、キリストの栄光を現します。ですから、私たちが礼拝をし、祈り、御言葉を聞き、賛美をする中で聖霊の働きが顕著になってきた時に、聖霊ご自身のことが語られるというよりも、キリストご自身の御業と栄光が現れますね。これに似せて、偽預言者は獣を拝ませるのです。

そして、「地と地に住む者」に、最初の獣を拝ませたとありますね。この後で、地に住む者たちが獣の刻印を押される場面が出て来ます。けれども、聖徒たちが殺されます。ところが、15 章に行くとして殺された者たちが天において神に賛美している姿が出て来ます。地上には住んでいませんが、天に住んだのです。それから 16 章において、獣の刻印を押されている地上に住民が、神からの激しい怒りの災いを受ける場面が出てきます。地に属しているのか、天に属しているのか、その大きな違いです。

¹³ また、大きなしるしを行い、人々の前で火を天から地に降らせることさえた。

偽預言者が、しるしを行ないます。これはあたかも、エリヤのような働きであり、また黙示 11 章に出て来た二人の証人のような働きであります。ですから、それも真似することができるので、人々は彼について行くようになるのです。覚えていますか、出エジプト記で、主がファラオの前で、モーセとアロンを通してしるしを与えられました。杖を蛇に変え、また戻すというようなものです。けれども、そこにファラオの魔術師が同じ事をしました。それで、ファラオの心は頑なになりました。このように神の働きを真似て、神の働きを無効にしようと仕向けるのです。

2A 獣の像の礼拝 14-15

¹⁴ また、この獣は、あの獣の前で行うことが許されたしるしによって、地に住む者たちを惑わし、剣の傷を受けながらも生き返ったあの獣の像を造るように、地に住む者たちに命じた。

しるしを行なって地上にいる人々を惑わしています。そして、「剣の傷を受けながらも生き返ったあの獣」とありますが、反キリストは剣によって一度、殺されたようになります。このことは、ゼカリヤ書 11 章 17 節に既に預言されていました。「わざわざ。羊の群れを見捨てる、能なしの牧者。剣がその腕と右の目を打ち、その腕はすっかり萎えて、右の目の視力は衰える。」そして、黙示 11 章によりますと、彼は底知れぬ所から出て来て、二人の証人を殺すとあります。

この出来事をもって、偽預言者は獣の像を造るように地上に住む人々に命じます。これがキリストの御国と獣の国の違いですね。御国においては聖霊によって、神の愛によってキリストをあがめるようにされますが、獣の国では強制させます、人々に要求するのです。そして、患難期の半ばに、次のことが起こるとパウロは預言します。「2テサロニケ 2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」そして、その獣礼拝は、彼の像をそこに置くことによって実行されます。

人間の歴史の中にこれと同じようなことが、いつも起こってきました。その典型は、ダニエル書 3 章です。「3:1-2 ネブカドネツアル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に建てた。2 そして、ネブカドネツアル王は人を

遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官を召集し、ネブカドネツアル王が建てた像の奉献式に出席させることにした。」そして、その儀式においてひれ伏さなかったダニエルの三人がいて、燃える火の中に投げ込まれたという話があります。同じダニエル書で 8 章 13 節には、「常供のささげ物や、あの荒らす者の背き、そして聖所と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことか。」とあります。これは、アンティオコス・エピファネスのことです。彼は、ユダヤ人を強制的にギリシア化させようとしていました。ユダヤ教のあらゆるものを憎み、それを完全に払拭して、ギリシアの宗教を拝ませようとしていました。それで、青銅の祭壇には豚のいけにえを強要し、また神殿の敷地にゼウスの像を立てさせました。これが、荒らす者のする背きの罪でした。

そして歴史を見れば、いや今現在も、像に対して礼拝行為をさせる場面はたくさんあります。ヨハネがこの啓示を受けたローマでは、皇帝礼拝が盛んであり、皇帝の祭られた宮もありました。キリスト者はそれを拒み、迫害されました。あとで説明しますが、13 章の預言の背景は、皇帝礼拝が色濃くあるでしょう。そして日本も戦時中、天皇のご真影の前で深々と礼をしなければなりません。北朝鮮はどうでしょうか？金日成の像が平壤にあり、その像に献花しないと観光さえさせてもらえません。そして旧ソ連ではスターリンの像がたくさんありましたが、人々を支配するために像を拝ませるとするのは常套手段になっており、これが終わりの日には、獣の像を拝むように命じられ、全世界的に行なわれるのです。

¹⁵ それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。

像を拝ませるだけでなく、像に息を吹き込みます。これは恐ろしい事ですが、オカルトの世界の深みではあり得ることです。ティアティアラにある教会でも、偽預言者のイゼベルが行なっていることが、「サタンの深み(2:24)」と言われていました。こうやって物を言うことができるようにさせます。今は、AI 技術の発達で、AI ロボットの神父が信者のために祈っているのを見たことがあります。非常に不気味でしたが、像がものを言うことができるようになるのは時間の問題だと思いました。

そして、「その像を拝まない者たちをみな殺すようにした」ということです。像の前で拝むのか、そうではないのかは、主の前では大きな意味を持ちます。黙示録 15 章で天において賛美している者たちが、「獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々(2 節)」とあります。死に至るまで忠実に、主の証しを立てたのです。20 章 4 節にも、「彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。」とあります。その反面、16 章 2 節には、「獣の刻印を受けている者たちと獣の像を拝む者たちに、ひどい悪性の腫れものができた。」とあります。イエス様が受けた誘惑において、「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。(マタイ 4:10)」と拒まれま

した。主にのみ仕える、拝むということです。

3A 獣の刻印 16-18

¹⁶ また獣は、すべての者に、すなわち、小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、その右の手あるいは額に刻印を受けさせた。

私たちはこれまで、「証印を押される」という神の働きを見てきました。先ほど引用した、エペソ書 1 章においては、聖霊によって私たちが贖いの証印を押されたところを見ました。そして、黙示録 7 章において、14 万 4 千人のイスラエル十二部族の神の僕が、「額に印を押されている」幻がありました。9 章においては、いなごのような悪霊が、さそりの毒を持っているのですが、「額に神の印を持たない人たちには加えてよい、と言い渡された。(9:4)」とあります。このようにして、額に印を押されるとことは、主に属するものとされていることを示しています。新しいエルサレムでも、その住民が「彼らの額には神の御名が記されている。(22:4)」とあります。

イスラエルの民に対しては、主の命令を、「申 6:8 これをしるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。」とありますが、自分の動かす手、自分の目の上にあるところに主の命令があるのか？ということが問われているのですが、主の命令が、手につけられていたり、額の上にあるということは、主の前にいつも自分がいることを意識させられますね。そして、エゼキエル書 9 章にて、偶像礼拝が神殿の敷地内で行われているというスキャンダルがありましたが、それを嘆き悲しんでいる人々がいました。その人たちには、額にしるしをつけて、神の裁きから守るようにさせました。それが、先に話した黙示録 7 章の 14 万 4 千につながります。

そして獣の国では、その物真似をするのです。獣の名の刻印を押されます。そして、その対象は、「小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも」とあり、無差別であり、全住民の登録です。同じようなことが、今度は逆に神の裁きの座において行われます。「20:12 死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。」とあります。

^{17a} また、その刻印を持っている者以外は、だれも物売り買いできないようにした。

これは経済的迫害です。この背景になっているのは、先に言及した皇帝礼拝であります。ローマ帝国は、いろいろな民族がいて、それぞれの宗教がありました。しかし、ローマ国民の意識を作り、統合させるために、ローマのための国民宗教を造りました。その中で皇帝は神の子であり、主であり、救い主だったのです。この礼拝は、儀礼的なものであり、焼香をたてて、「カイサルは主である」とさえ言えばよかったのです。ところが、イエスが主であると告白しているキリスト者は、その告白を拒みました。

それからというもの、ローマの人々は、何か災いが起こると、神自身である皇帝の機嫌を損ねたからだ、きちんと仕えていないから災いが起こるのだとして、言いがかりをでっちあげました。特に、皇帝の像で香をたくことを拒んだ時に、それを見た祭司は、「こいつは、皇帝の像を拝まなかった」と、市場の中で言いふらすのです。そうすると、キリスト者が物を買おうとしても拒まれて、自分で市を立てて、物を売ろうとしても買ってくれないのです。これが、背景です。

そして、これが終わりの日に、獣の像を拝まなかった者に対する迫害として行われます。それがどのような形であるのか、終末預言で、最も大きな関心事になっています。今の経済と今の社会です。全てデジタルでデータ化されています。クレジットカード、キャッシュカード、スイカなどのカード、そしてインターネット取引に変わってきています。ですから、その電子取引システムを誰かが掌握すれば、一気に経済活動を牛耳ることができます。さらには、そのカード情報が体内に埋め込まれるという技術まで発展していることです。マイクロチップを手の平に注射して、その中に情報が入っているという方向に動いています。

けれども大事なのは、その刻印が何なのか？ということではなく、あくまでも、自分はだれに忠誠を誓っているのか？なのです。神とキリストなのか、それとも獣なのか？ということです。私たちも、主イエスに仕えるのか、それとも他のものに仕えてもいいとしているのか？であります。

^{17b} 刻印とは、あの獣の名、またはその名を表す数字である。¹⁸ ここに、知恵が必要である。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。それは人間を表す数字であるから。その数字は六百六十六である。

知恵がいる、思慮ある者は獣の数字を数えなさいとのことです。このように命令されているのですから、私たちは獣の名を表す「六百六十六」に注目しなければいけません。これは名前を表して、人間を表しているとあります。ギリシア語、ヘブル語、そしてラテン語においても、それぞれのアルファベットに数字があてがわれています。これを、「ゲマトリア(gematria)」と言います。名前のアルファベットを足すと、その合計が六百六十六になるというものです。これが最も妥当な解釈と言えるでしょう。全ての名前に、ゆえに数字をあてがうことができます。

そしてこの数字には、何か意味があるでしょうか？先ほど「人間を表す」と呼びました。七が完全数で神を示しているならば、六は神より劣る人間を示している数字と言えます。人は神のかたちに造られましたが、「神よりいくらか劣るもの(詩篇 8:5)」として造られました。しかし、人は神にいくらか劣るというところに留まることを拒みたいです。神に似た者ではなく、神になりたいと思います。神に劣るのですから、神との結びつき、神の支配に服従することによって、神の子として世界を支配することができるのに、神から独立したいと思うようになっているのです。こうした高ぶりが、「六」

の数字に含有されているようです。

GREEK			HEBREW		
1	A, α	Alpha (A)	1	א	Aleph (A, E) A
2	B, β	Beta (B)	2	ב	Beth (B, V) B
3	Γ, γ	Gamma (G)	3	ג	Gimel (G) G
4	Δ, δ	Delta (D)	4	ד	Daleth (D) D
5	E, ε	Epsilon (E)	5	ה	He [Heh] (E, A) H
6	Ϝ, ϝ	Digamma (V, W)	6	ו	Vau (O, U, V, W) V
7	Z, ζ	Zeta (Z)	7	ז	Zayin (Z) Z
8	H, η	Eta (Ē)	8	ח	Cheth (Ch) Ch
9	Θ, θ	Theta (Th)	9	ט	Teth (T) T
10	I, ι	Iota (I)	10	י	Yod (I, J, Y) I
20	K, κ	Kappa (K)	20	כ	Kaph (K, Kh) K
30	Λ, λ	Lambda (L)	30	ל	Lamed (L) L
40	M, μ	Mu (M)	40	מ	Mem (M) M
50	N, ν	Nu (N)	50	נ	Nun (N) N
60	Ξ, ξ	Xi (X)	60	ס	Samekh (S) S
70	O, ο	Omicron (O)	70	ע	A'ayin (A'a, O) O
80	Π, π	Pi (P)	80	פ	Pe (P, Ph) Ph
90	Ϟ	Coph (Q)	90	צ	Tzaddi (Tz) Tz
100	P, ϱ	Rho (R)	100	ק	Qoph (Q) Q
200	Σ, σ, Ϻ	Sigma (S)	200	ר	Resh (R) R
300	T, τ	Tau (T)	300	ש	Shin (Sh, S) Sh
400	Υ, υ	Upsilon (Y, U)	400	ת	Tau (Th, T) Th
500	Φ, φ	Phi (Ph)	500	ך	Kaph-final (K, Kh) K
600	Χ, χ	Chi (Ch)	600	ם	Mem-final (M) M
700	Ψ, ψ	Psi (Ps)	700	ן	Nun-final (N) N
800	Ω, ω	Omega (Ō)	800	ף	Pe-final (P, Ph) Ph
900	Ϻ	Sanpi	900	ץ	Tzaddi-final (Tz) Tz

G. W. Kelly

ゴリヤテがダビデに対峙した時に、彼の背の高さが六キュビト半、また槍の穂先が六百シェケルとあります。ゴリヤテは、人間の武器によって戦おうとしていましたが、ダビデは、「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしたイスラエルの戦陣の神、万軍の【主】の御名によって、おまえに立ち向かう。(1サムエル 17:45)」と言っています。そしてネブカドネツアルの先ほどの金の像の寸法も、「3:1 その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。」とあります。さらに、そこに音楽を奏でる楽器を数えると、六種類になっています(3:5 等)。神によってその権威と力、栄華が与えられたのに、それを自分の栄光に帰そうしていたのです。そして極めつけは、ソロモンの時代の富、金の重さであります。「1列王 10:14 一年間にソロモンのとこ

ろに入って来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」ソロモンが初め、主に愛されて富が与えられましたが、徐々に主への愛から、その富と栄華に目が言ってしまったということです。この僅かな、神から人への栄光の転換が、反キリストの霊をよく表しているといえます。

私たちは反キリストが身近なものであることが、これで分かりましたね。僅かなずれから出て来ます。彼はほとんど完全な、すぐれた人物なのです。しかし、その僅かに劣っているところで、それを完全な神、完全なキリストを拒む根拠、理由としていくのです。それで、キリストなしの国、キリストなしの世界を求めたいと願います。しかし、これこそが光の御使いにも化けるサタンの仕業なのです。しっかりと堅く立って、キリストの教え、使徒の教えを守っていきたいです。